

連載

87 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (65歳・内科)

94歳の母をみとる息子さんは、まるでパニック状態

今から10年ほど前、私が50歳台半ばで男盛りを少し過ぎ、体力的に無理がきかないと実感し始めたころのことです。



その患者さん(94歳、女性、認知症・廃用症候群)は、ひと月前ほどから、自宅での終末医療のみとり状態にありました。後見人さんとの話し合いで、毎日、点滴1本と酸素療法、膀胱にはカテーテル留置した状態での在宅医療を継続することになりました。ある日、深夜の12時ごろ、患者さんの病状が急変しました。血圧が低下し、意識障害を起こしたのです。ベッドの横で一昼夜付き添っていた息子さんは、電話で何度も病状報告をしてきたのです。その回数は20回を越えていたでしょうか。当院への往診依頼ではなく、病状報告という

その行為は、あきらかにパニック状態です。母の死に直面し、動揺している姿が目には浮かびます。その電話から聞こえてくる息子さんの嗚咽は、悲しみで魂が揺さぶられているようでした。

私は、本院のソファで仮眠をとっていましたが、朝方6時ごろ、病状の最終確認のための往診依頼を受け、患者さん宅へ向かいました。患者さんは静かに天国へと旅立たれていました。

熟睡できなかったその日の日勤業務は、集中力に乏しく、まるで宇宙遊泳をしているよう

でした。私は生まれて初めて、寄る年波には勝てないなと実感したのです。

私は、現在65歳です。

還暦を過ぎれば、それまでの人生を歩むスピード感から、徐々に、人生を味わい深く噛み締め、人生の質を意識する体感重視へとギアチェンジが進み、安定歩行となります。

さらに、今後の人生に「健康長寿」という命題をつきつけられる歳でもあり、生命重視へパラダイムシフトするべきです。

個々の人生の未来は、まるで「アインシュタイン相対性理論」研究のようです。

「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 21名
(常勤6名、非常勤15名)

内科・外科専門医 18名
(国立がんセンター勤務歴有3名)

精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
(ペインクリニック科)

末期がん治療(緩和ケア)
相談室開設!

Hyper Blood Viscosity (高血液粘度群)を科学する 臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

http://www.touzaikai.jp/